



メジロ（留鳥）

全身明るい黄緑色の体の小さい鳥。目の周りには白い輪があります。花の蜜や果実も食べます。チーチー、チュルチュルチュルと高い声で複雑に鳴きます。

目次

巻頭言	2
「関わることの大切さ」	城南中学校長 田中 修
1 小さなころみ ①	3
「道徳の教科化に伴う指導法と評価に関する研究」	早川小学校総括教諭 物部 典彦
2 小さなころみ ②	4
ノーマン市学校視察報告	
下府中小学校総括教諭 瀬戸 哲子 泉中学校総括教諭 生垣 麻美	
3 学びの架け橋	5
プロジェクト研究「基礎基本部会」	
～全国学力・学習状況調査の結果を活用した学力向上の研究～	
国府津小学校教諭 山科 奈央	
4 ある教室から	6
「待つこと」	教育指導課指導主事 松澤 俊介
5 研究所だより	
① 学習指導法研修会	7
② パワーアップ研修	8
③ 新刊図書の紹介	8

「関わることの大切さ」

城南中学校長 田中 修



電車の車内での出来事。乳呑み児が泣き出す。母親は、どうするのかと見てみると、すかさずスマートフォンを取り出し、動画を見せる。泣き止む子供。何事もなかったかのようになり、あたりは静まりかえる。

別の場面。ある日の昼食時に家族で外出に出かける。食事をしていると、隣にデートと思われる男の子と女の子が座る。注文を終えるや否や、それぞれのスマートフォンのゲームに興じる2人。その間、ほとんど会話のない状態。静かに時間が過ぎ去っていく様子を、あきれながら見入ってしまった。

現代は、多くの場面で便利なものや楽しいものが増えてきて、それらのことも影響してか、使い方によっては、人間関係のあり方も変化してきたように思う。加えて、その利便さ故に場合によっては、人と人とを分断するようなことになりはしないかと心配している。

先の母親は、何故「どうしたのー？大丈夫だからね～」などと言いながら、直接抱きしめたり、あやしたりすることはできなかったのだろうか。スマートフォンの動画などに頼らずに、頭を撫でたり頬ずりしたりすることで、時間はかかったかもしれないが、泣き止んだのではないだろうか。

あの男の子と女の子は、何故せつかくの2人の時間を、どのような話題でもよいから会話を楽しめないのだろうか。目の前の相手と言葉を交わすことなく、どうして別々のゲームに没頭することができるのであろうか。話さないまでも、目を見たりニコッと笑ったりだって良いではないか。

昨今、直接面と向かって、相手の表情を見て話したり、うなずいたりすることが減って

きてはいないだろうか。子育てにおいて、スキンシップをしたり、呼びかけたりすることが少なくなっているような傾向を危惧しているのは、私一人だけであらうか。

松尾芭蕉の俳諧理念に「不易流行」がある。「不易」は時代を超えても変わらないもの、「流行」はその時々に応じて変化していくもの。この二つは相反する概念のように思えるが、芭蕉は、根本は1つであると考えた。

弟子の向井去来が、芭蕉の俳諧の心構えを『去来抄』にまとめている。そこに

「不易を知らざれば基^{もと}たちがたく、流行を

知らざれば風^{ふう}新^{あら}たならず」

とある。すなわち、普遍的な真理を知らなければ基礎は築けない。しかし基本を知っていても、時代の変化を知り、革新していかなければ進歩はない、と。芭蕉は常に新しさを求めて不断に変化する中で、不変の「永遠性」は確立されると提唱したのである。

変わってならないものとは、教育で言えば、「関わること」ではないだろうか。教える人、教えられる人の立場の違いはあるものの、人と人とのふれあいにより生み出されるものは、多々あるように思う。

教育現場におけるICTなどといった「流行」を効果的に利用しつつ、人が関わることにより生み出される教育的効果を信じ、見直す時が来ているのではないだろうか。スマートフォンの動画に負けない、目で訴える、言葉で教える、身振り手振りで伝えるといった「関わること」を前面に押し出した「不易」を大切にしたい。



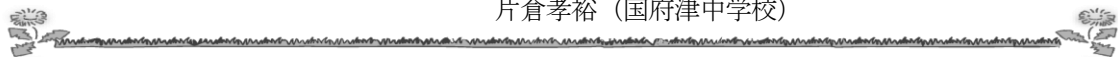
道徳の教科化に伴う指導法と評価に関する研究

共同研究「道徳」研究員

物部典彦（早川小学校） 富田涼子（桜井小学校）

岸 靖（矢作小学校） 川上 貴（白鷗中学校）

片倉孝裕（国府津中学校）



1 はじめに

本研究は、「子供の姿から学ぼう」を合言葉に研究員による授業提案を積み重ねる中で授業モデルを提示していくこととした。「子供の姿から学ぶ」とは、資料との出会い合わせ方、発問のつくり方、板書の工夫、話し合う方策等、具体的な子供たちの姿をイメージしながら、考えていくことである。子供たちが聴く、考えを創る、伝え合う活動を積み重ねて「考え、議論する道徳」をめざしてきた。小田原の道徳とは、「子供の姿から学ぶ道徳」であると胸を張って言えるようになりたいものである。

2 授業の流れ

「道徳の授業ってどうやるの？」やはり、まずはここからである。本研究では、道徳性を養うための基本的な授業として「インプット→インテイク→アウトプット」の流れを意識した授業を提案したい。インプットとは、授業の前段で道徳的価値自体の理解を促す段階であり、インテイクは、それを自分のこととして捉える段階である。そして最後にアウトプットとして、道徳的価値を実現させようとする気持ちや意思につなげていく。これらの過程を意識した授業を展開して子供たちの道徳性を養っていききたい。

3 授業づくりのポイント

「考え、議論する道徳」にするために、どのような方策ができるのか。子供たちの「今」をとらえ、「未来」に向けて意欲を向上させていける授業でありたい。そんな授業に欠かせないものとして、発問と板書は重要である。

発問は、多面的・多角的に子供たちの心をゆさぶるものをめざしていく。板書は思考の流れが把握しやすく、考えの視覚化を意識したものをめざしていく。本研究では、そういった授業作りに効果的な計画表を3種類用意し、市内共有フォルダで公開している。

4 オススメ評価方法

評価活動においては、授業中や授業後の生活の中で「書く活動」を取り入れ、子供の考えを見とり、積み重ねていくことが大切である。道徳性の育成は、道徳教育の要である道徳科の授業を通し、学校教育全体を通して行われるべきものであり、授業で扱った後こそが大切である。授業後の生活の中で道徳的実践力がどのように身につけているのか、こういったアンテナを教師がもち、子供たちへ返していく。この繰り返しがよりよい指導と評価の一体化となると考える。観点としては、本時に考えて、心が動いたこと(道徳的理解・判断力・心情)を見とり、その後、行動しようとする・行動した(意欲と態度)ことを見とるという部分が大切である。

5 いつでもどこでも学び合い

これからの道徳では、授業を単体で考えるのではなく、他教科とリンクしたり、1つの価値を複数時間かけて深めていったりすることも考えられる。どんな授業でも一人一人の本音が飛び交い、かつそこに相手のことを真剣に「聴く」という思いやりあふれる授業にしたい。このような道徳授業を通して、クラスを創り上げていくことを想像すると、来年度からの道徳、ワクワクしてきませんか？

ノーマン市学校視察報告

下府中小学校 瀬戸 哲子 泉中学校 生垣 麻美



このたび小田原市教員海外研修視察派遣教員として、平成 29 年 11 月 4 日から 10 日まで、アメリカ合衆国オクラホマ州ノーマン市を訪問してきました。

現地の小学校 2 校と中学校 2 校を見学して特に興味をひかれたのは、(1) 施設・設備、特に IT 機器が充実していること、(2) 「ガイダンス・レッスン」という授業があること、(3) さまざまな児童生徒への支援があることです。

(1) 施設・設備の充実 どの教室にもパソコン、プロジェクター、スクリーンがあるのは当たり前。3D プリンターも児童が使っていました。一面の白い壁をよく見るとそれは大きなスクリーン兼用のホワイトボード。市内で最も新しいリーガン小学校では、学年ごとに中央スペースを取り囲むように放射状に教室が配置されています。どの教室も見わたすことができるそのスペースでは、学年集会が行われていました。給食を食べるための食堂にはステージがあり集会もできるそうです。広くて機能的でうらやましく思いました。

(2) ガイダンス・レッスン 各学校には学年ごとにカウンセラーが在籍していて、カウンセリングをする他に「ガイダンス・レッスン」という授業も受け持っています。リンカーン小学校で見学した 4 年生の授業は、『『怒り』とはどんな感情なのか』『怒りを感じたらどうしたらよいのか』という内容でした。自分の心をコントロールするスキルを学び、ポジティブに自分を成長させる心構えを学ぶことが目的だそうです。

(3) さまざまな支援のしくみ 家庭の収入に応じて給食が無料になり、その対象はおおよそ 50% を超えるそうです。児童生徒の人種もさまざまなため、英語が苦手な子供への補習が時間割に組み込まれています。成績不振者への補習の他に優秀者へのカリキュラムもあり、ロングフェロー中学校では時間割の「0 時間目」に上級レベルクラスが設定されています。また、地域の人々から寄付金を集める生徒のボランティア活動もあります。ウィッチャー中学校ではちょうどフットボール大会の日でしたが、女子が選手として試合を行い男子はチアボーイをして試合を盛り上げるのだそうです。その試合のチケット売上を恵まれない人々へクリスマスに食事を提供するために使うということでした。

最近ではコミュニケーションが苦手な子供が増えているとか、保護者と良好な関係を保つことが課題であるとか、学校を取り巻く問題は似ているようです。小学生は私たちに興味津々で話しかけてくるのですが中学生は気持ちを内に秘めた感じだったので、子供の姿も同じだなと思いました。終わりになりますが、歓迎して下さった各学校とお世話になった皆様に感謝申し上げます。



プロジェクト研究 ～全国学力・学習状況調査の結果を活用した学力向上の研究～ 「基礎基本部会の取組から」

プロジェクト研究・基礎基本部会研究員

高井郁世（大窪小学校） 牧岡寛之（町田小学校）

森本 圭（富水小学校） 山科奈央（国府津小学校）



1 はじめに

全国学力・学習状況調査「算数 A」の計算問題について誤答を分析すると、「解き方を間違えて覚えている」「解き方が分からない（忘れている）」「計算ミス、問題の写し間違い」等の理由で、正答に辿り着けない児童が多くいることが分かった。そこで、計算の仕方を定着・向上させるにはどうしたらよいか研究した。

2 研究の経過

「モジュールで行う、繰り返しを使って計算力を定着・向上させる取組を検証する」～低位・中位の児童を対象に～というテーマを設定し、2年間研究した。

1年目は、早川小学校の取組を参考に各研究員が在籍校において実践し、その結果を分析した。

<主な方法>

- ・週1回15分程度（1モジュール）
- ・1～3週目は同じプリント、4週目はプリントの数値を変えて行う。（数値が変わっても解くことができれば、計算力が定着したと考える。）
- ・振り返りカードを書く場合は、自分でつまずきに気付けるように、「弱点の発見（どういう問題を間違えたか、なぜ間違えたか等）・補強（どうすれば間違えないか等）」に関することを書く。

その結果、4週目は1週目よりも、低位の児童とクラス全体の正答率が上がったことから、この取組が正しい計算の仕方を身に付けさせるために効果的であることが分かった。

同じプリントを3回繰り返すことの良さは、「児童が自分の間違いやすいところを5. 自覚して、修正することができた。」「計算

は正確だが時間内に全問解けなかった児童が、回答数を増やそうとすることで意欲の継続が図れた。」「同じ問題を活用することで、低位の児童の安心と達成感につながった。」等が挙げられる。

また、教師側からは「個のつまずきを見極め、指導にいかせた。」ことが成果である。例えば、単なる計算ミスなのか、解き方が分からないのか、同じ問題であれば間違いの理由を分析しやすい。（計算ミスであれば次のプリントでは正しく解けるが、解き方が分からないのであればまた間違えている。）

同じ問題を活用することは、低位・中位の児童のつまずきの傾向を分析しやすくなり、教師は児童個々の特徴をふまえた手立てを考え、次回までに個別のアプローチを行うことで、確実に計算力アップにつなげることができたと考える。2年目は、1年目の取組を継続しながら、低位・中位の児童が「どういう点につまずいていたか」「どうやって指導したらできるようになったか」詳細に分析し、計算力の定着に向けた効果的な取組の研究を実践していく。

3 おわりに

「繰り返す」ことは、計算の仕方を身に付けさせるために効果的であることが分かった。しかし、ただ繰り返すだけでは十分ではない。繰り返すことでつまずきを見極めやすくし、低位・中位の児童に対する個に応じた手立てを講じることでより成果が出ることが分かった。

4週目に、計算ができるようになった自分を実感したときの児童の笑顔が、嬉しかった。



「待つこと」

教育指導課指導主事 松澤 俊介



記録的な寒波で寒い日が続く1月、市内のある幼稚園を訪問しました。「おはようございます。」と元気に登園する園児たち。私との初めての出会いにも関わらず「鬼のお面つくったよ。」「昨日は〇〇に行ったよ。」とそれぞれ思い思いのことを伝えにきてくれました。教室に入るとすぐに園服や荷物を棚に片付けながら、自分の力で一日の園生活の様々な準備をしていました。

戸外遊びの時間、地域の方やボランティアの方と一緒につくった土俵では、高校の相撲部から教わった本格的な作法で相撲遊びが行われていました。遊びが終わると「呼び出しさん」のように箒で土俵をきれいに掃除します。最後は年長のAさんと年少のBさんが二人で掃除の仕上げに入っていました。

そこに組のみんなで遊ぼうと園庭の遠い方から声がかかりました。「きれいになるまでやらなくては…」「早くみんなのところに行きたい…」焦る二人の箒さばきは乱れ、急ぎたいのにきれいにならなくて困っていました。その様子を見た年少組の先生から「待ってるから、慌てずにきれいにしてね。」と声がかかり、二人は安心して掃除を続けました。さらに「じゃあ、土俵の使い方を見に行こうか？」と先生に連れられて年少組のみんなが周りに集まってきました。先生が「Aちゃん、お掃除の仕方を教えてくれる？」と尋ねると、Aさんは少し恥ずかしそうに「足あとが残らないようにきれいにするんだよ。」と年少さんに教えてくれました。先生が「ありがとうAちゃん、今度はお相撲遊びのやり方を教えてね。」とお願い

いすると、年長さんとして次回の舞台を任されたAさんは、照れた様子を見せながら、笑顔でうなずきました。「Bちゃんも最後まできれいにしてくれてありがとう。」と声をかけられたBさんは次の遊びでも生き生きとしていました。

このような温かい言葉かけで、子供たちの自信が積み重ねられ、次への意欲につながっているんだと改めて感じました。また、子供たちが考えたり、活動したりする場や時間を十分に確保できるように先生方が「環境」について工夫されている様子をたくさんの場面で目にすることができました。わが子の保育園時の様子を振り返ってみると、私は、慌てて園服を脱がせ、スモックを着させながら「早く！早く！」と急かしていたことを思い出しました…。一日という限られた訪問でしたが、幼稚園の先生方が「環境」と「援助」のあり方を探りながら、大切な瞬間を逃さないよう丁寧に子供たちを見守っていることを強く感じました。協議が終わった後も、子供の変化やこれからの手立てについての話を尽きることなく続けている先生方の頭の中には、明日からの子供の成長の場面がいくつもイメージされ、「目指す子供の姿」がしっかりと描かれているようでした。





学習指導法研修会 ～どの子ども【分かる・できる】をめざした授業づくり～

教育指導課指導主事 綾部 敏信

1 はじめに

昨年度、「どの子ども【分かる・できる】をめざした授業づくり」をテーマに、「授業のユニバーサルデザイン」の考え方を取入れた研修会を実施したところ、多くの受講者から、授業づくりの際の大きなヒントとなった等の声をいただいた。よって今年度も同テーマでの研修とし、より多くの教員に受講してもらいたいと考え実施することにした。(以下ユニバーサルデザイン＝UDとする)

2 第1回研修会

実施日 平成29年6月27日(火)

受講者 小学校25名、中学校11名

講師 星槎大学大学院准教授

阿部 利彦 氏

(1) 教育のUDとは

多くの子供達にとって分かりやすく、学びやすく配慮された教育のデザインである。

(2) 教育における3つのUD

①授業のUD化 ②教室環境のUD化

③人的環境のUD化

(3) UD化3本柱(「視覚化」「焦点化」「共有化」)に基づく5つのテクニック

①「ひきつける」(視覚化)

- ・ 掲示物等、余計な視覚情報を減らす。
- ・ 一度に扱う子供の考えは1つにする。
- ・ 1つの考えを深く解釈することで自分との相違点や類似点を意識することができる。

②「むすびつける」(視覚化・焦点化)

- ・ 子供の関心がある分野、得意な分野にむすびつける。
- ・ 既習事項や子供が知っていることとむ

すびつける。

- ・ 子供の言葉を使ってむすびつける。

③「方向づける」(焦点化)

- ・ 子供を「とまどわせない」ということ。
- ・ 子供の「まちがい」は宝の山。誤答が現れたからこそ可能となる学びがある。

④「そろえる」(共有化)

- ・ 「おいて行かれる」子供を作らず皆の理解をそろえる工夫をする。
- ・ 「わからない」「できない」に正直になれるクラス。

⑤「わかった」と実感させる

- ・ 「自分の力でやり遂げた」と感じさせる。
- ・ 達成できたことについて仲間に認めてもらう機会をつくる。

3 第2回研修会

小中学校別に本テーマに沿った授業研究を実施しました。

・ 小学校 平成29年11月20日(月)

授業者 山王小 杉崎 順子 教諭

・ 中学校 平成29年11月27日(月)

授業者 酒匂中 平澤 彬江 教諭

杉崎教諭は4年算数「面積」、平澤教諭は2年数学「平行と合同」の単元で授業提案していただきました。杉崎教諭の授業では、面積を求める式からどのような図形であるかを考えることを課題とし、考えやすくするための視覚化や集団思考による共有化において工夫が見られました。平澤教諭の授業では、三角形の合同条件を見いだすことを課題とし、手がかりとして既習事項を共有化として扱い、条件に沿って実際に三角形を作図し、実感的に合同条件に迫るための工夫がなされていました。



パワーアップ研修

11年目を迎えた『パワーアップ研修』

研修相談員 瀧本朝光 押切千尋

今年度は、小学校18名、中学校7名、計25名の研修者が1年間の研修を終えました。
今号では、小田原教育126号（HPをご覧ください）に掲載した研修者以外の方からの意見を紹介します。

《研修者所属長の意見》

『学校を訪問していただく研修であるため、研修者の負担が減りありがたい。また、学級の生徒や教室の様子をありのままに見ていただけるので、具体的な研修となる』

『研修者自身が持つ課題への丁寧な説明があり、研修者が安心して研修できた。また、授業の質をより高いものにしようとする研修者の向上心を汲み取っていただくことで、研修者が指導日を楽しみにして子どもへの指導を行うことができた。』



《指導相談員の思い》

『研修者が、授業の度に1つずつ新しい発見をし、次回に活かしている姿に感動しています。』
『研修者が行う授業を校内の他の先生にも見てもらうことで、学校に学びの場面を増やしていく機会としたい。』
『研修者のテーマ実現を目指し、共に考える助言を心がけてきた。ダメ出しをして教師を傷つけたり自分流のやり方を押し付けたりする話し合いにならないようにしている。』

《他市町指導主事からの意見》

『まず、研修者ありきで、研修者自身がテーマを決め、主体的に取り組めるようにしている点が素晴らしいと思います。』

『小田原の人材育成に対する熱い思いを実感することができました。指導に当たられている方々の“本気さ”がひしひしと伝わってきました。子どもたち同様、先生の育成も心の育成なのだと改めて思いました。』

今後も、「大変だったけれど、受けて良かった。」と言ってもらえる研修にしていきたいと考えています。来年度も、意欲のある先生方と出会えることを楽しみにしています。

研究所だより⑤



新刊図書を紹介

～新しく購入した書籍を紹介します～

1	通級指導教室と特別支援教育のアイデア小学校（シリーズ9）	7	平成29年度版小学校新学習指導要領の展開 外国語編
2	教室でできる特別支援教育のアイデア中学校編（シリーズ4）	8	平成29年度版中学校新学習指導要領の展開 外国語編
3	AD/HD、LDがある子どもを育てる本	9	小学校英語はじめる教科書
4	発達障害がある子どもの進路選択ハンドブック	10	教科のプロもおすすめる ICT 活用術
5	「小1プロブレム」解決ハンドブック	11	3法令改訂（定）の要点とこれからの保育
6	知的障害特別支援学校の ICT を活用した授業づくり	12	平成29年度告示幼稚園教育要領・保育所保育指針・ 幼保連携型認定こども園教育・保育要領原本

※書名だけを載せています、詳しくは教育研究所へお問い合わせください。